

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

《理工農系》

●大阪大学工学研究科生命先端工学専攻

「国際連携大学院 FD ネットワークプログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

海外の大学院から招聘した著名教授による講義を大学院博士前期課程（一般コース）の講義科目として開講し、留学生と一緒に日本人学生に受講させた。また、英語コースで開講している科目を一般コースの講義科目として開講し、留学生と一緒に日本人学生に受講させた。しかし、日本人学生の受講者数は10名程度にとどまり、一般コースのすべての日本人学生に受講させることは極めて困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

海外から招聘した著名教授による講義科目にしても、英語コース向けに開講している講義科目にしても、一般コースの日本人学生の受講者数が少なかったのは、英語による講義科目がすべて必修科目ではなく選択科目であったことと、英語による講義科目を受講しなくても日本語による講義科目を受講するだけで大学院博士前期課程修了に必要な単位をすべて取得できるためであると考えられる。従って、国際化に対する意識が大きく向上し、国際レベルの研究能力が飛躍的に向上したのは日本人学生の場合、一部の学生に限られる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

一般コースのすべての日本人学生に、英語による講義を受講させ、これらの学生の国際的視野を高め、国際的な競争力を身につけさせるためには、講義はもちろん、ゼミナール、研究指導、発表、事務連絡をすべて英語で行なう必要がある。すべて英語で教育・研究を行なっている英語コースのカリキュラムと一般コースのカリキュラムを完全に一元化し、英語による講義を受講しなければ大学院博士前期課程修了に必要な単位を取得できないようにすれば、おのずから、英語による講義科目を受講する日本人学生の数は増加し、その結果、大学院教育の国際化は格段に進むと考えられる。